

近代古墳の研究

豊田 祥三

はじめに

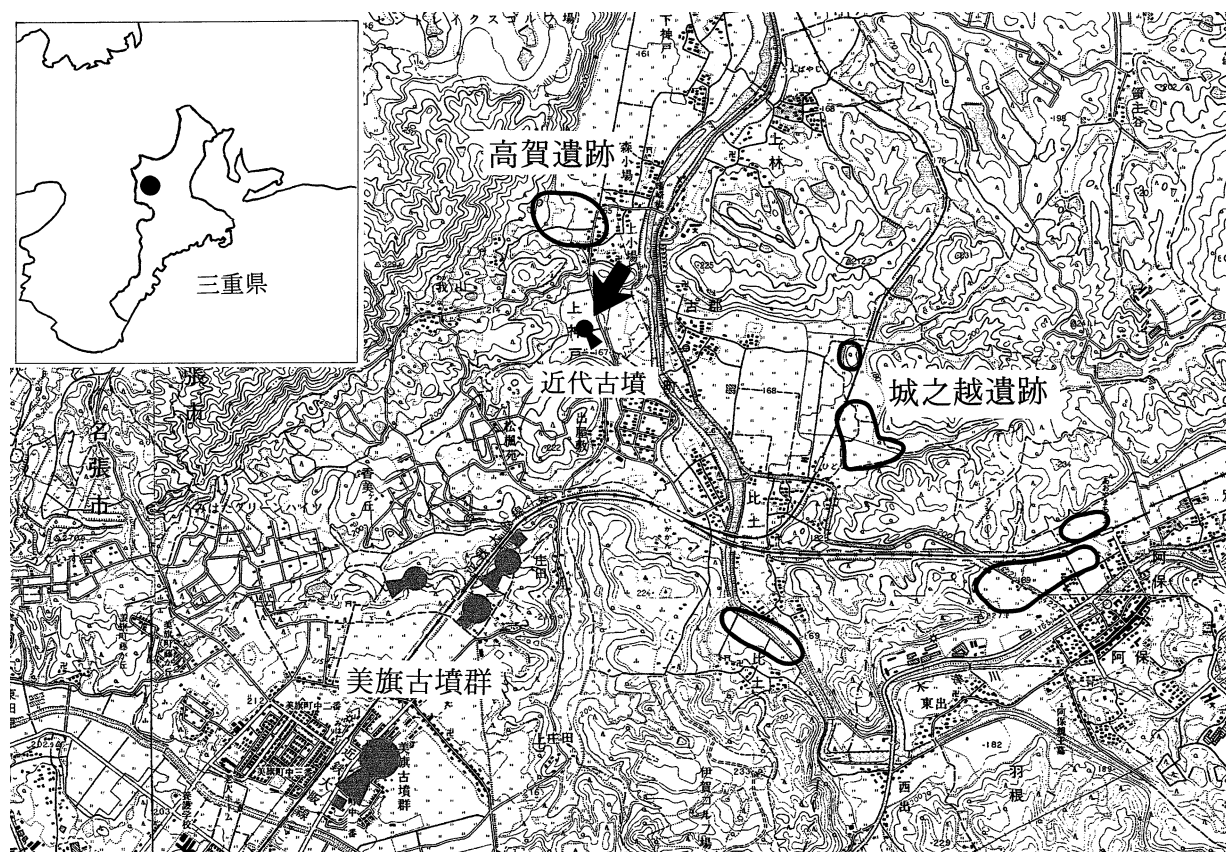
近代古墳は、伊賀市（旧上野市）上神戸に所在した古墳である。水田耕作などにより墳丘部分が削平され、後円部の一部が残るのみであった。昭和61年のほ場整備の際に、竪穴式石室と考えられる埋葬施設が半壊した状態で出土したため、工事を中断し調査が行われた¹⁾。その結果、全長30mの前方部の短い帆立貝形古墳であることが判明し、石室内から三角板革綴衝角付冑をはじめ、頸甲、肩甲、三角板鋌留短甲といった武器類のセットと、鉄鉾、鉄刀、鉄剣が出土し、墳丘のくびれ部や周溝からも土器や埴輪が出土した。

しかしながら、伊賀における中期古墳の貴重な調査事例であるものの、当時の埋蔵文化財行政は大規模な調査の連続であり、厳しい状況のなかでの緊急調査であった。また、甲冑をはじめとした鉄製品の保存処理の問題もあって、報告書は刊行されていなかった。

近代古墳は伊賀最大の古墳群である美旗古墳群と学史上著名な石山古墳の間に位置する古墳で、埋葬施設と副葬品が明らかになっている貴重な事例である。今回、個々の詳細に関しては正報告に譲ることとし、ここでは古墳の概要を述べたうえでこれらの遺物を紹介・検討し、当古墳の意義付けをおこなう。

1 古墳と出土遺物の概要

a 古墳の概要



第1図 近代古墳位置図

近代古墳は、両側を丘陵によって画された狭い谷合地形の中央部に位置する。調査前の段階ですでに田畠の造成で墳丘の大半が削平され、後円部の墳丘の一部が島状に残存するのみであった。墳丘規模の確認のため周辺にトレンチを入れたところ、周溝を確認したため、調査範囲を墳丘・周溝全面に広げた。その結果、全長30m、後円部径24m、前方部長6.0mの前方部の短い帆立貝形の古墳であることが判明⁽²⁾した。

埋葬施設は大半が破壊されていたが、一部が残存しており、礫を積み上げた長軸は4.0m以上、幅は約1.0mの竪穴式石室であった。石室の主軸は、ほぼ東西方向である。石室内の埋土からは須恵器が採集されている。石室の床には粘土が貼られており、木棺を固定するために敷かれたものとみられる。

棺内からは短甲をはじめとした武器・武具が原位置を保った状態で出土した。石室の西端から出土した武具は短甲の中に衝角付冑を逆転させ、冑前方を短甲の右側に向けて収められている。板綴は下方に落ち込んだ状態で出土している。短甲の後胴の押付板から地板の第1段が、内側に折れこみ、衝角付冑上に被さり、その上に右肩甲が錆着していた。さらに破片の一部は短甲内外に散在していた。左の肩甲は短甲の左側に折りたたまれたような状態で出土している。また、頸甲と考えられる破片が短甲の現況上端部にあった。

以上の出土状況から短甲の埋納形態は立位で、短甲上に頸甲・肩甲を装着状態で配置していたものと考えられる。短甲の後胴側には鉄刀が添えられている。石室内からは他にも鉄刀・鉄鉾が出土しているが、粘土床の脇にて出土しており、棺内のものではなく棺外に供献されたものとみられる。

b 出土遺物の概要

甲冑は出土後、保存処理に出され、処置がなされたものの、付着した土の除去・錆落としが充分になされないまま処理され、保管されてきた。頸甲・肩甲については接合・復元がなされておらず、短甲についても、復元はなされているものの後胴の押付板や脇部など接合が不十分な箇所があり、将来的には再処理の必要があるが、甲冑の地板配置など基本的な属性は確認できるため、ここでは、現状で確認できる事項を紹介⁽³⁾する。

甲冑 三角板革綴衝角付冑

鉄板構成 伏板・地板第1段・胴巻板・地板第2段・腰巻板からなる三角板革綴衝角付冑である。地板1段は9枚の鉄板から構成される。地板第2段は12枚で構成される。部分的に欠損するが、構成する鉄板はすべて揃っている。

着装状態で前後27.4cm、左右21.6cm、全高19.4cmを測る。地板は衝角部に近いほど上重ねに連結され、伏板、胴巻板に下重ねされる。遺存状態は良好である。伏板は前後29.5cm、頂部で最大幅9.1cm、先端部で5.0cmを測る。

地板第1段は左右4枚ずつ、後頭部に1枚の計9枚の地板で構成される。長さ6.0～8.8cm、高さ4.8～5.2cmほどの三角板と逆三角の地板を交互に配する。後頭部には両側辺と上縁が弧状をなす逆三角形の地板を1枚配する。

胴巻板は、幅2.4cmを測り、1枚の鉄板である。

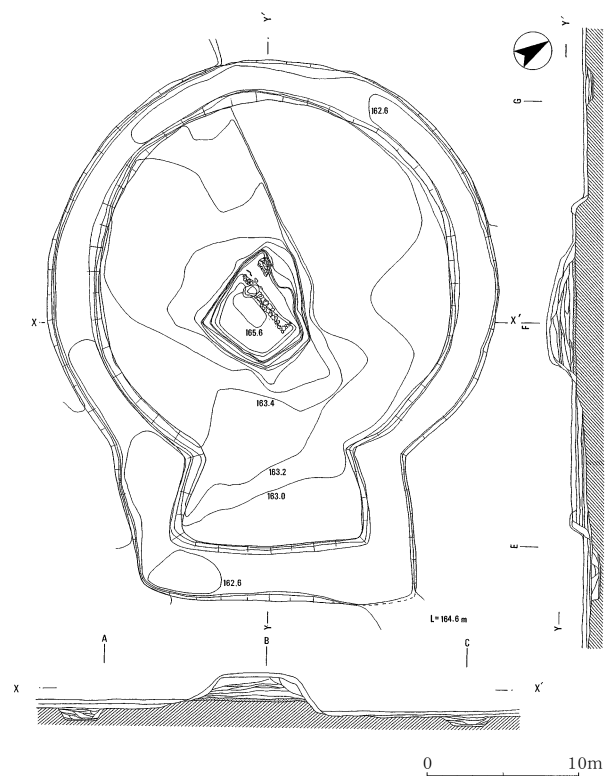
地板第2段は左5枚、右6枚後頭部1枚の計12の地板で構成される。長さ10～12cm、高さ6.0～6.5cmほどの三角板の地板を交互に配する。後頭部中央部に配された三角板を境に左右の地板枚数が異なり、右側の衝角部寄りには小形の三角板を継ぎ足しており左側より1枚多い。後頭部には三角板の地板を配する。

腰巻板は、幅2.6cmで、1枚の鉄板である。

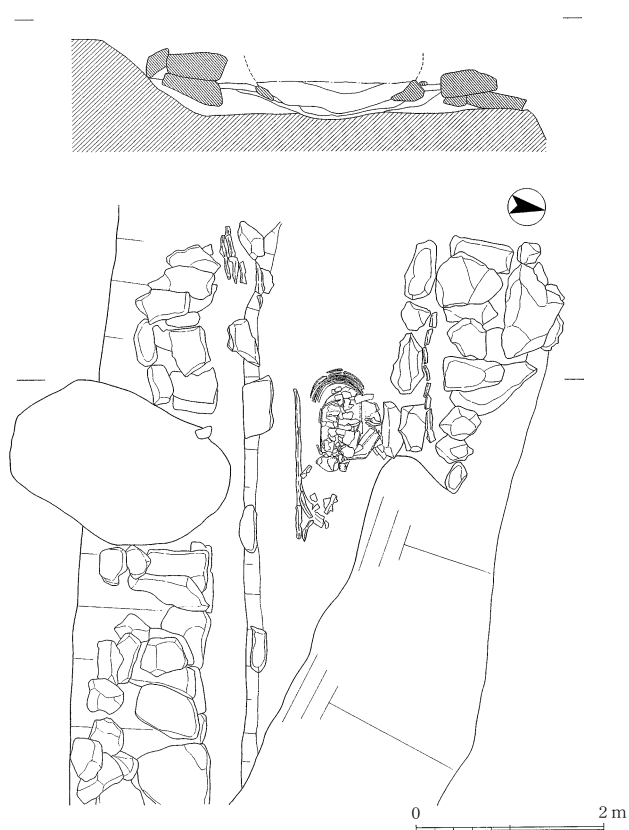
衝角底板・竖眉庇構造 腰巻板は、衝角部先端付近で内側に折り曲げ、衝角底板に連結する。また、同時に衝角部先端を内側に折り曲げて衝角底板と腰巻板の上に重ねる。一部欠損するが、野上氏の分類の「上接式」⁽⁴⁾である。衝角底板・竖眉庇は一枚の鉄板である。

綴 衝角付冑に伴う幅10cm、残存長61cmの鉄板を馬蹄状に曲げて製作された板綴で、いわゆる「一枚板綴」である。覆輪は一部に目視で確認できる箇所もあるが、不明瞭である。綴孔はX線でみても確認しづらい。冑から垂下

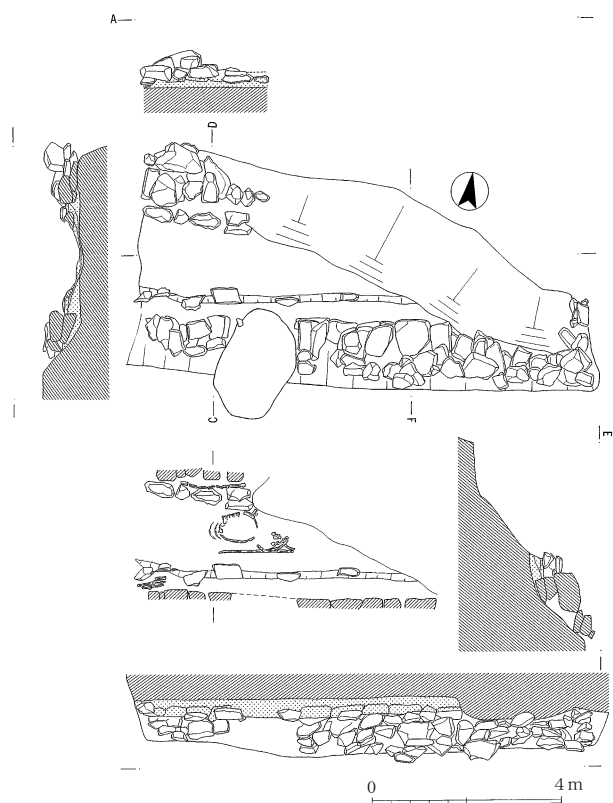
古墳平面図



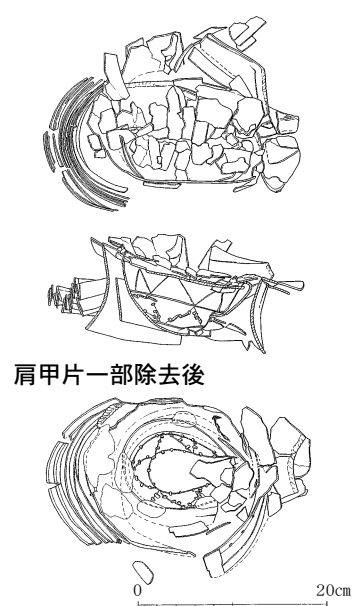
竪穴式石室遺物出土状況



竪穴式石室実測図



甲冑出土状況図



第2図 近代古墳平面図・遺物出土状況

するための孔は水平方向に2孔1組で、2箇所確認できる。

三角板鉾留短甲

地板配置 前胴、後胴とも堅上3段、長側4段の計7段で構成される胴一連の三角板鉾留短甲である。前胴の地板配置は小林謙一氏のA型⁽⁶⁾、鈴木一有氏の分類のA・鼓形系統⁽⁷⁾に相当する。地板の配置は展開模式図で示した通りである。堅上第2段の地板枚数は後胴3枚、前胴2枚で長側の1段・3段の枚数はそれぞれ7枚・9枚である。地板の合計は21枚である。

前胴の特徴 前胴は、脇部でやや押付板と地板の連結が異なっている点を除けば、左右とも同じ鉄板構成である。引合板は左右各1枚で、上端は角がとれ丸みをもつ。幅はほぼ一定で3.4cmである。右前胴の引合板の上端部から押付板にかけて、木質が付着している。また、左側の引合板には繊維痕が残存している。

押付板は引合板と連結する部分で幅6.2cmで、右側の引合板の側縁から2.0・3.7cmほどの位置にはワタガミ受緒孔が横に2孔認められる。

長側第1段の地板は左右各2枚で構成され、引合板側の地板は三角板であるが、脇部側の押付板との連結部分には押付板の形状に合わせて裁断された地板を用いており脇部まで続く。

長側第2段の帯金は、左右各1枚からなり幅3.8～4.0cmである。長側第3段の地板は、合計9枚で構成され、逆三角の地板と三角の地板を交互に連結している。

脇部の特徴 右側脇部の押付板は長側第1段の帯金に接するものの、左側は接しない。

後胴の特徴 後胴は、堅上第3段の帯金部分が欠損しているほか、押付板に肩甲片や錆瘤がおびただしく付着しており、不明瞭な部分があるが、それ以外については鉄板構成が推定出来る。

堅上第1段の押付板は、上縁がややふくらみをなし、1枚の鉄板を彎曲させて形成される。押付板の幅は左右43.6cm、上下12.2cmである。

堅上第2段の地板は、3枚で構成される。底辺22.9cm、高さ8.7cmの二等辺三角形の地板を中央に配し、その左右に逆台形を呈した地板を連結し、懸緒孔とみられる小孔がX線写真より横位に2孔確認出来る。

堅上第3段の帯金は1枚の鉄板で、幅は約4.0cmである。

長側第1段の地板は3枚の鉄板で構成されていたと考えられ、中央部に逆三角形の地板を配し、その左右に台形状の地板を連結する配置をとっていたと思われる。台形状の地板は脇部まで続き、長い。そのため、長側第1段の地板は合計7枚となり、本短甲の大きな特徴となる。

長側第2段の帯金は1枚で、幅は中央部で3.5cmを測る。前胴の左右各1枚を含めると3枚からなる。幅は後胴中央部で3.5cmを測る。幅は左3.9cm、右3.8cmである。

長側第3段の地板は5枚の鉄板で中央に二等辺三角形の地板を配し、逆三角と三角板を交互に連結し、前・後胴合わせて9枚で構成される。

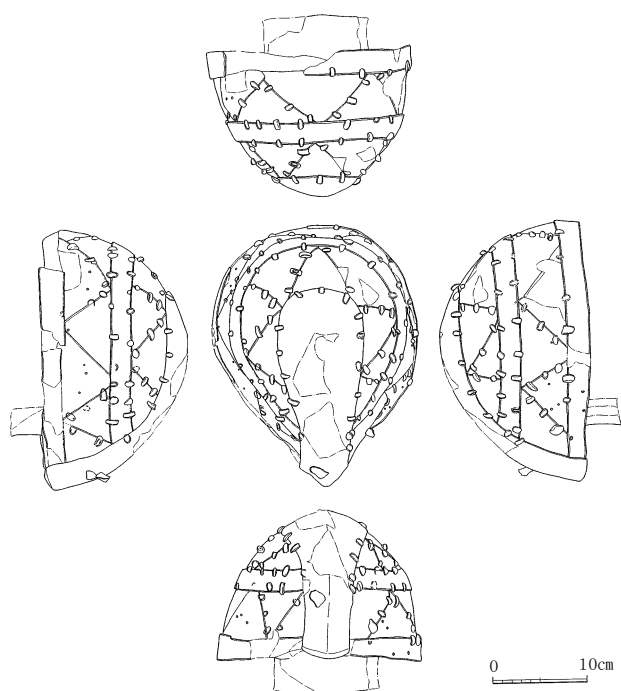
長側第4段の裾板は、1枚の鉄板で、幅約8.5cmを測る。中央1枚、左右各1枚で構成される。

鉾の特徴 鉾頭径は5mmほどで、滝沢誠氏の属性分類⁽⁸⁾（以下滝沢分類と称する）の「大型鉾」に相当する。鉄板の連結数については後胴堅上第3段における連結数を編年の指標とされている。近代古墳の短甲は後胴堅上第3段が欠損しており、連結数は不明である。帯金と引合板などの縦板との連結位置は縦板の2箇所帯金を連結しており、連結位置は滝沢分類の「C類」に相当し、3枚留めを避けている。

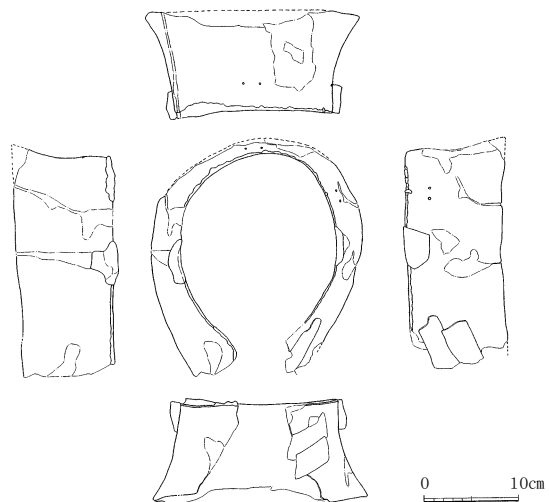
覆輪 押付板と裾板には革組覆輪が施される。覆輪孔は、3～4cm程度のピッチで穿孔されている。覆輪は、右前胴の押付板や後胴左側の押付板には残るが、全体的に遺存状態は良くない。

頸甲 左側の一部が残存するが他にも小破片があり、接合の可否の検討が必要である。正面立面形は逆台形で、一

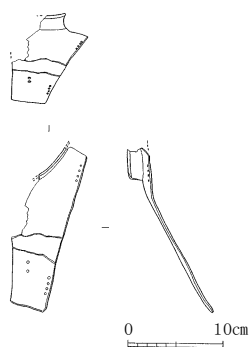
三角板革綴衝角付冑



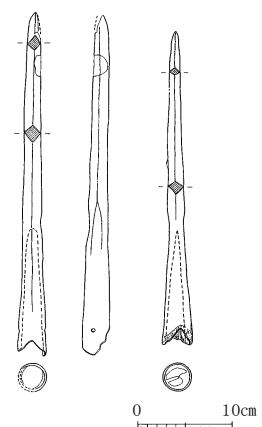
綴



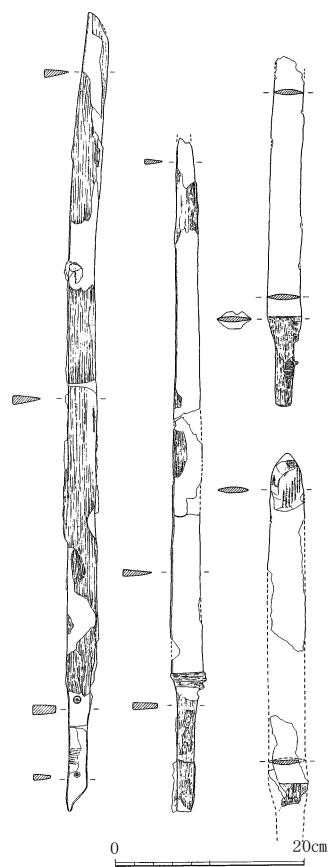
頸甲



鉄鉾



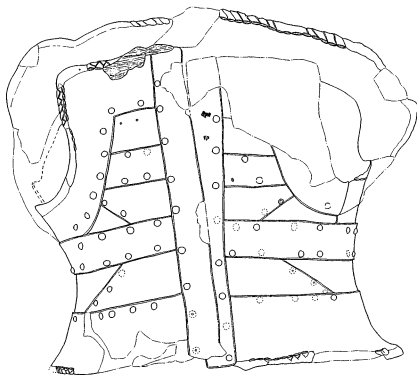
鉄刀・鉄剣・鉄鎗



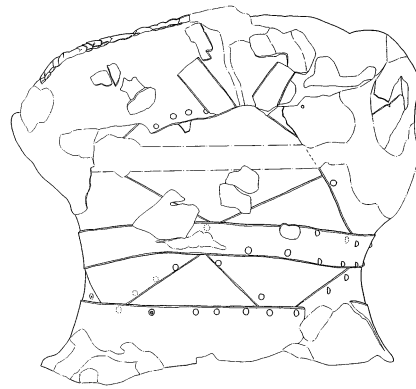
第3図 近代古墳出土遺物実測図(1) (1 : 8)

三角板鉾留短甲

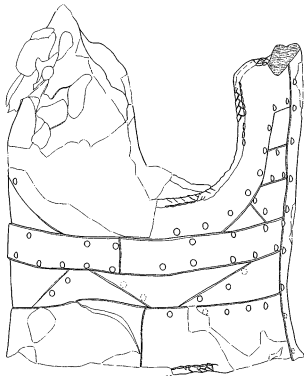
前胴



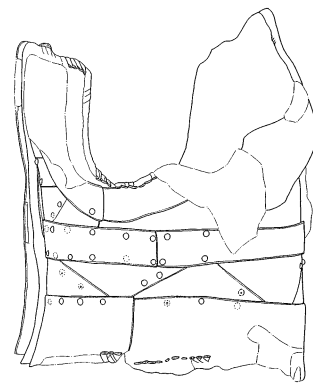
後胴



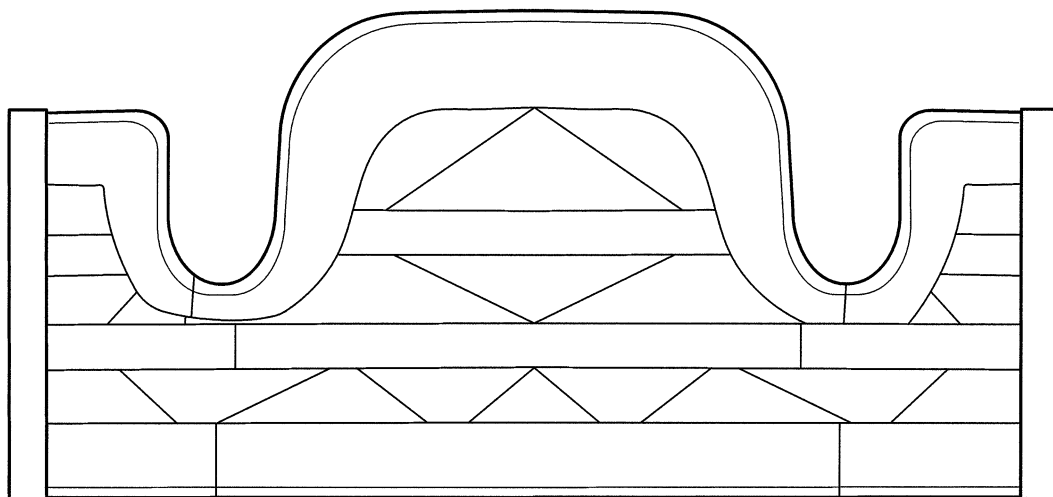
右側面



左側面



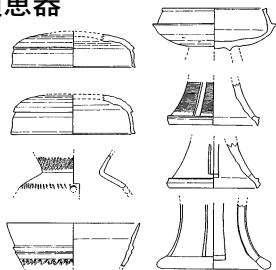
第4図 近代古墳出土遺物実測図(2) (1 : 8)



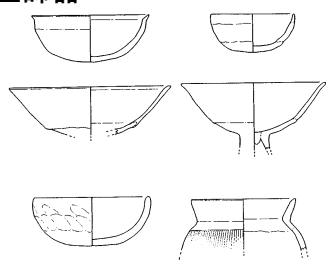
第5図 短甲展開模式図

部に鉾が残存することから、鉾留のものと考えられる。下縁部は斜めになる。藤田和尊氏の分類⁽⁹⁾のⅢ-b類に相当する。側縁にはX線写真でみると肩甲と連結するための4孔1組の威孔が3箇所確認できる。また、前側の引合板寄りには引き合わせのための小孔が縦位に2孔認められる。

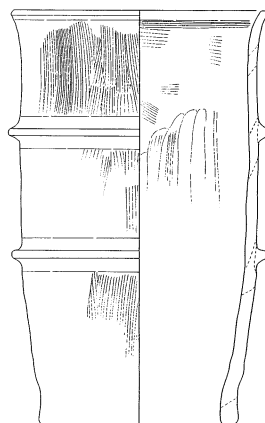
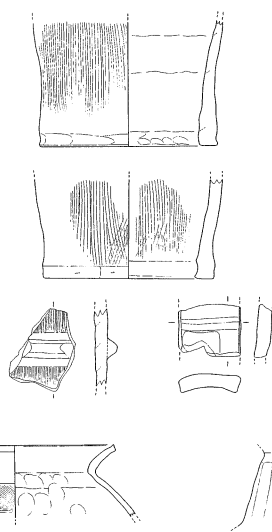
須恵器



土師器



埴輪



0 20cm

第6図 近代古墳出土遺物実測図(3) (1:8)

肩甲 左右一対存在したと考えられるが、破片がバラバラのため図化できていない。将来、破片を検討したうえで接合・復元する必要があるが、現状で確認できる事項について触れる。

破片の残存などから片段15段前後になるとみられる。一部の破片には鉄板端を「J」状に折り曲げているものがあり、頸甲に懸垂した時点での最下段の部分に相当するとみられる。それぞれの下縁近くにはX線写真では4孔1組の威孔が3箇所確認できる。

武器 鉄刀・鉄槍・鉄鉾

武器は鉄刀・鉄槍・鉄鉾が出土している。直刀は、全長84.0cm、両平造で、茎尻は隅抉尻のものと、残存長は70cm、茎尻が十文字尻で、おそらく片関のものがある。鉄剣・鉄槍はそれぞれ1点確認されている。鉾は2点出土しており、ともに刃部の断面は菱形で、明瞭な鎬をもつのが特徴的で、袋部には山形の抉りが入る。関は不明瞭になっている。

土器・埴輪 (第6図)

須恵器 蓋杯・高杯・甕・直口壺が出土している。蓋杯は、天井部には丁寧にヘラケズリされ、口縁部との境も明瞭である。

土師器 くびれ部から鉢と高杯、周溝埋土から甕・壺が出土している。

埴輪 前方部側の周溝内から埴輪が出土している。2条3段の円筒埴輪で、全周しないため、透かし孔については不明である。焼成は土師質であるが、やや硬質のものもある。外面の調整は粗いタテハケで、内面はナデ調整である。外面には赤色顔料が残り、赤彩されていたことがわかる。形象埴輪の破片と考えられるものもある。

2 遺物の考察

a 甲冑の編年的位置

近代古墳の甲冑について先学の研究を参考に検討を行う。当古墳の三角板革綴衝角付冑は、地板第1段が9枚で、地板2段が12枚、胴巻板幅2.3cm、腰巻板幅2.5cmである。また、地板第2段の地板枚数が左右で異なる点が特徴である。三角板革綴衝角付冑の新古の問題については地板枚数と全体の高さの中での帯金の占める割合がその指標とされている。鈴木一有氏によれば、地板第1段が11枚以上のものと9枚以下のもので様相が異なり、前者は単数

例しかなく、後者は複数例存在することからそれぞれ、試行期と量産段階の所産とされている⁽¹⁰⁾。近代のものは地板第1段は9枚であり、新しい要素をもつが、第2段は12枚あり、第1段が9枚のものの中ではやや古い部類に相当し、全体の高さの中での帯金の占める割合をみても48.9と小さく、試行期の所産とされる革綴冑に近い値を残す。また、地板第2段の地板枚数が左右で異なる点については、滝沢誠氏による研究⁽¹¹⁾がある。氏は、地板第1段と第2段の合計が24枚以上のものをⅠ式、20枚以下のⅡ式と大別し、Ⅰ式の冑はいずれも地板の上下配置が対象形を示さず、左右で地板枚数が異なることを示した。また、Ⅰ式の冑は同一地板構成をとるものがなく、Ⅱ式の冑の地板が第1段9枚・第2段11枚か第1段7枚・第2段9枚という定まった構成をとるのとは対照的なありかたを示すとも指摘されている。近代古墳例は地板の枚数ではⅡ式に近いが、地板構成ではⅠ式に近く、氏の分類のいずれにも属さない。従って、地板の枚数パターンにやや変則的な要素がみられる⁽¹²⁾。

次に鋲であるが、当古墳のものは一枚鋲で覆輪を施す。幅は10.3cmである。鋲の新古については、古谷毅氏が幅広いものから幅狭という変遷を想定されている。近代のものは1枚鋲のなかでも幅が広く、覆輪もある点からやや古相の部類に相当する。冑と鋲に関しては、諸要素から古墳築造時期よりも明らかに古い要素をもつ。

短甲に関しては、開閉装置の有無や、地板枚数、鋲の大きさ、鋲留数といった要素から新古を判断することとなる。帯金は3.6～3.7cm、鋲径は7mm前後と中間である。地板の枚数については中段と下段の地板の枚数がそれぞれ7・9枚と蝶番がなく、胴一連のものとしては類例のない組み合わせである。とりわけ後胴の中段の地板に関しては脇部まで続いており、通常は5枚であるが、3枚で構成されており、少なめの地板を用いて生産効率の省略化の傾向が窺える。また、形状も押付板や胴部の形状も曲線化しており新しい傾向がみられる。

頸甲については藤田分類のⅢ－bに相当すると考えられ、短甲同様、冑と綴とは時期差がある。

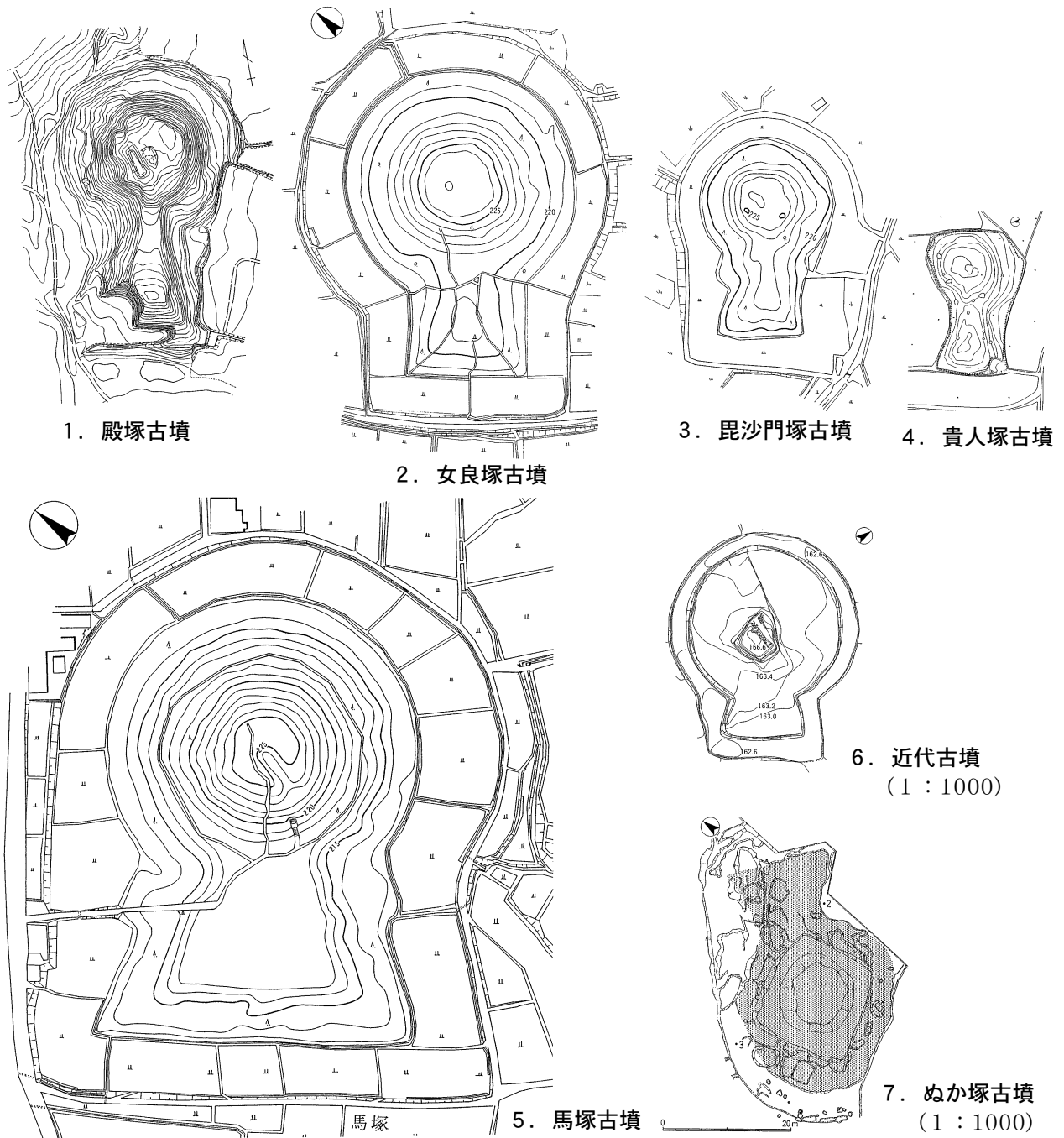
以上のことから、冑・鋲については中期前葉を中心とした所産と考えられるが、短甲・頸甲・肩甲については中期後葉を中心とした時期が想定できる。

b 甲冑にみられる編差に関して

近代古墳出土甲冑の地板の構成は類例のないものであった。日本各地で出土している短甲に関しては三角板鋲留短甲ひとつをとってみても全く姿・形が同一の個体は存在せず、必ず細部の編差、いわば個体独自の特徴がみられる。筆者がかって検討した長釣壺式の蝶番に関してもその形状は古墳ごとにそれぞれ異なる⁽¹³⁾。このような諸要素の差異は製作工程・集団の系譜の違いなども要因の1つとして考えられるが、当墳の衝角付冑の地板配置のように1枚の鉄板で済む箇所をあえて2枚で綴じるケースがあり、製作者があえて“イレギュラー”な要素を加えている可能性も考えられる。これらのことから細部の編差が個体ごとに存在することの意味に関しては、甲冑が単に一次的に量産され、王権から一方的なかたちで配布されたというものではなく、入手・流通に関しては王権の優越性は認めつつも、地方の首長達も自らの意思をある程度反映させることが可能で、言い換えれば、現在でいう、オーダーメイドともいうべき、地方の被葬者の要請に応じて製作されている可能性を考えてもいいのではないだろうか。

c 甲冑の組み合わせについて

近代古墳から出土した甲冑のセット関係は、衝角付冑と綴が革綴で、頸甲・短甲が鋲留の組み合わせからなる。甲、冑で異なる技法が用いたものがセットとなる例は知られるが、基本的には中期中葉の鋲留出現期のセットで、その際には冑が鋲留、短甲が革綴であるパターンが殆どで、その逆の冑が革綴、短甲が鋲留という組み合わせは極めて稀である。近代古墳と同様の組み合わせとしては現在のところ確認されておらず、九州の宮崎県の六野原6号墳・島内76号地下式横穴墓にて、横矧板鋲留短甲に三角板革綴衝角付冑が伴う例が報告⁽¹⁴⁾されているのみである。こうしたセット関係については藤田和尊氏の研究⁽¹⁵⁾が知られるが、セット関係の乱れがみられる古墳の被葬者を配布に不利な位置にいた被葬者と想定されている。近代古墳の場合、その背景については、冑は古く、短甲は新しい



第7図 美旗古墳群と周辺の中期古墳 (1 : 2000)

名称	墳形	規模	外面調整					口縁部				透孔	黒斑	底部 押圧	家	盾	蓋	靴	冑	動物	人物	備考
			タテ ハケ	Bb種	Bc種	Bd種	ヨコ	C種	外折	外反	貼り つけ	直立										
殿塚	前方後円	88m											○	有								壺形あり?
わき塚1号	方	23m											○	有								
わき塚2号	円	26m												有								
女良塚	帆立貝形	100m												有								
近代	帆立貝形	30m												有								須恵器TK208
馬塚	前方後円	141m												無								
玉塚	方	34m											○	無								
貴人塚	前方後円	55m											○	無								須恵器TK47

第1表 美旗古墳群の埴輪

セットをもつこと、当古墳が美旗古墳群から約1.5km北東という近距離に位置し、美旗古墳群の傍系集団の墳墓と考えられることから、被葬者が一括して入手できたものではなく、初期に入手した武具が旧式として混じった可能性も考えられる。

d 近代古墳の埴輪と美旗古墳群における埴輪との比較・検討

美旗古墳群は、累代的に首長墳クラス古墳が築造されることで、全国的にも著名な古墳群であるが、首長墳クラスの古墳の本格的な調査は行われておらず、殿塚古墳の陪塚のワキ塚1・2号墳と馬塚古墳の陪塚とされる玉塚古墳で昭和30年代に行われた調査⁽¹⁶⁾のみでその実体については依然不明な点が多い。ここでは、現状で確認できる資料などとの比較から近代古墳の埴輪について検討する。

群中で最初に築造されるのが88mの前方後円墳の殿塚古墳⁽¹⁷⁾である。殿塚古墳から採集された埴輪⁽¹⁸⁾には円筒・朝顔形・盾・甲冑形がある。資料のなかには壺形埴輪の可能性のある個体もある。円筒埴輪の口縁端部は屈曲している。外面にはタテナデやヨコハケが散見できるが、調整の詳細は不明である。殿塚古墳よりも若干先行すると考えられる石山古墳の円筒埴輪は透かし孔に逆三角や方形があり、鰭付も確認されている。口縁部端部も屈曲し、殿塚でも口縁部端部は屈曲するが、透かし孔は円が確認されているのみで、鰭付の存在は不明である。盾形の破片には綾杉文が確認できる。

わき塚1号墳の埴輪⁽¹⁹⁾は家・円筒埴輪が確認されており、円筒にはB種ヨコハケが確認⁽²⁰⁾されている。

女良塚古墳は墳頂部で家形埴輪が出土しているが、円筒埴輪については良好な資料がなく詳細は不明であるが、採集した破片をみると酸化焰焼成で黒班をもつが、殿塚やワキ塚よりは焼きがやや硬緻で、褐色を呈することから築造時期はこれらの古墳よりは後出するものと考えられる。

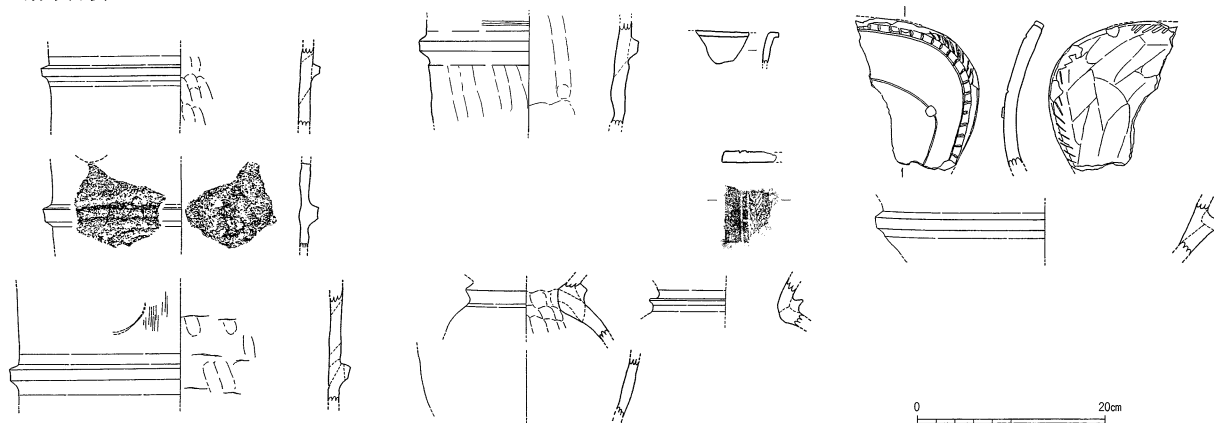
毘沙門塚古墳に関しては墳形から、女良塚に後続すると考えられているが、埴輪の有無に関しては不明である。陪塚と考えられている矢羽塚では還元焰焼成の埴輪が採集されているという。

馬塚古墳では現在でも埴輪片が採集できる。円筒・朝顔・家・蓋形が確認⁽²¹⁾されている。円筒埴輪は口縁部端部の屈曲は消失しており、須恵質まではいかないものの、かなり硬質である。馬塚古墳の陪塚とされる玉塚古墳は、昭和30年代の調査で多くの埴輪が出土している。多くの家形埴輪をはじめ、蓋形・靱・冑形埴輪が出土するなど豊富な形象埴輪をもつ。円筒埴輪についてはBd種ヨコハケが確認されており、焼成はかなり硬質のものと土師質のものが併存している。口縁部端部には貼りつけ突帯をもつ円筒埴輪が確認できることから埴輪の生産には近畿を中心とした集団の関与も想起される。

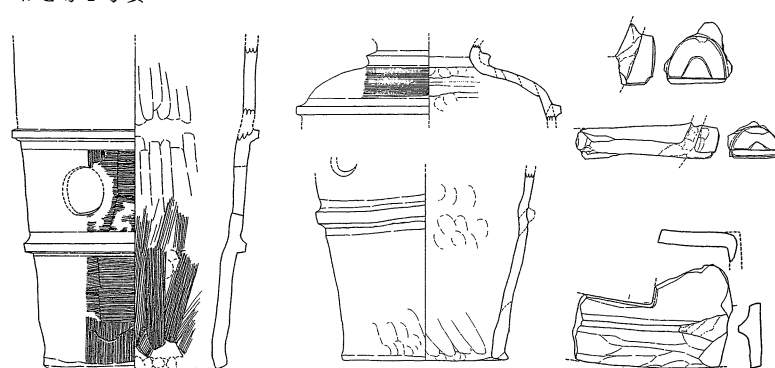
貴人塚古墳は県によって周溝部が調査され、埴輪が出土し、資料の一部が紹介⁽²²⁾されている。外面調整はBd種ヨコハケ⁽²³⁾が確認されているが、焼成はやや硬質のものと完全な須恵質を呈するものもある。底部外面に押圧技法が確認できる個体がある。形象埴輪は馬形埴輪が確認されている。

近代古墳の円筒埴輪についてみると、資料数が少なく制約があるものの、器壁は厚手で、外面調整には非常に粗いタテハケが施されているのみで、ヨコハケは施されず製作手法については大雑把な印象を受ける。また、伊賀北部の同時期と考えられる伊予之丸古墳の埴輪と器高がほぼ一致することが確認できることから、埴輪製作に従事した集団の存在は窺えるが、埴輪の意匠は在地色が強い。一方で、築造時期は近代より後出する美旗古墳群の玉塚古墳では、近代例と比較しても調整や成形が丁寧で、口縁部端部は非常にシャープなつくりをした埴輪が確認でき、埴輪の製作に習熟した製作集団が携わったとみられ、口縁部端部には貼りつけ突帯をもつ円筒埴輪が確認できることから近畿を中心とした集団の関与が想起される。近代古墳については、優秀な副葬品をもつ墳でありながら、埴輪の造りは粗雑であり、副葬品から想起される先進性は埴輪に関しては反映されていない。甲冑を副葬する古墳に関しては王権との関連で説明されることが多いが、埴輪からは大和や河内といった近畿地方の特徴は見出せず、必

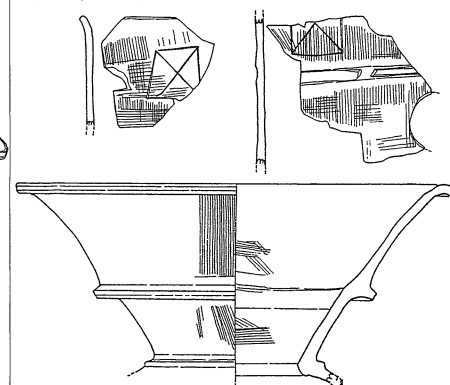
殿塚古墳



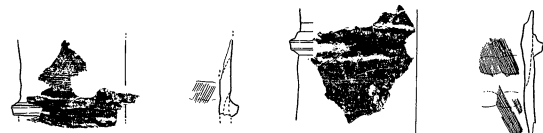
わき塚1号墳



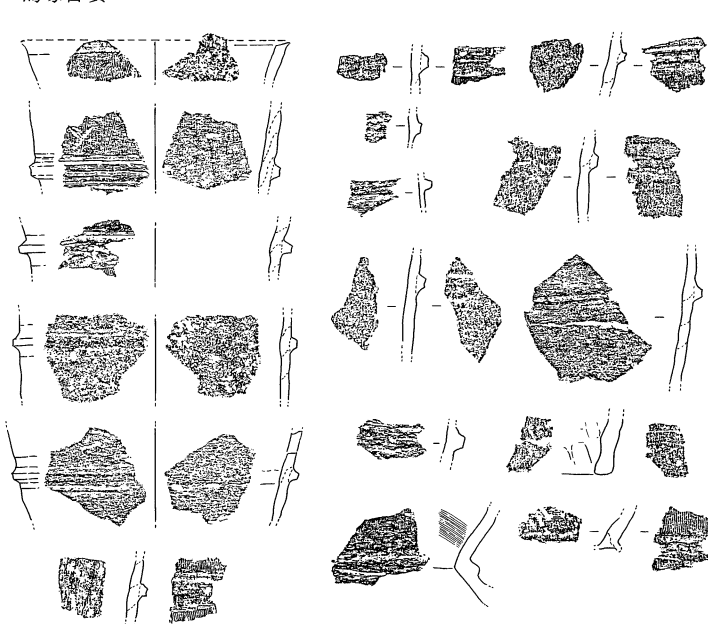
わき塚2号墳



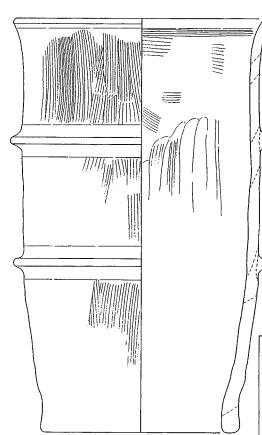
女良塚古墳



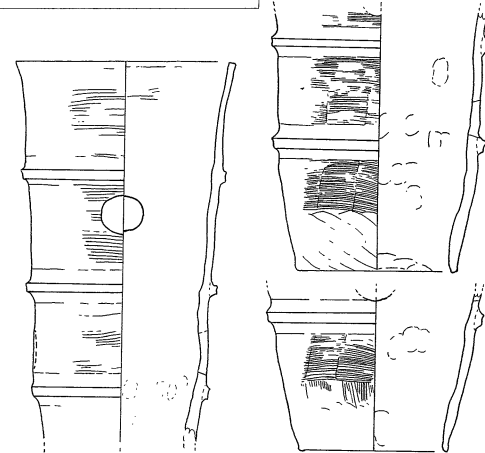
馬塚古墳



近代古墳



貴人塚古墳



第8図 美旗古墳群の埴輪 (1:8)

ずしも埴輪の生産体制には反映されていないことを考慮すれば、埴輪の生産に関しても地方の首長の意思をある程度反映させることが可能であったと考えられる。

e 土器について

古墳からは墳頂で須恵器、くびれ部から土師器が出土している。伊賀地域における古墳時代中期の土器の様相については不明な点が多く、編年についても構築されていない。伊賀の須恵器生産の開始に関しては現状ではMT15段階の二つ峠窯が確認されているのみでそれ以前の様相は不明である。従って現状では陶呂編年を参考にする。近代古墳の須恵器は、高杯の脚部にやや新しい要素がみられる個体があるものの、概ね田辺昭三氏による陶呂編年⁽²⁴⁾のTK208型式併行期に相当する。土師器の高杯については同様のものが森脇遺跡⁽²⁵⁾にてTK208型式併行期の須恵器と共存することが確認されており、同様の時期と捉えて良いだろう。

f 古墳の時期について

築造時期については、出土した須恵器・土師器の特徴が田辺昭三氏による陶呂編年のTK208型式に併行する時期に相当することや、埴輪の焼成は須恵質にはなっていないものの、やや硬質のものが確認できることから中期後葉であると考えられる。冑や鍔に関しては古い要素を残すが、短甲とその付属品などの副葬品の特徴をみても妥当であると考えられる。

3 近代古墳の被葬者像と伊賀における位置付け

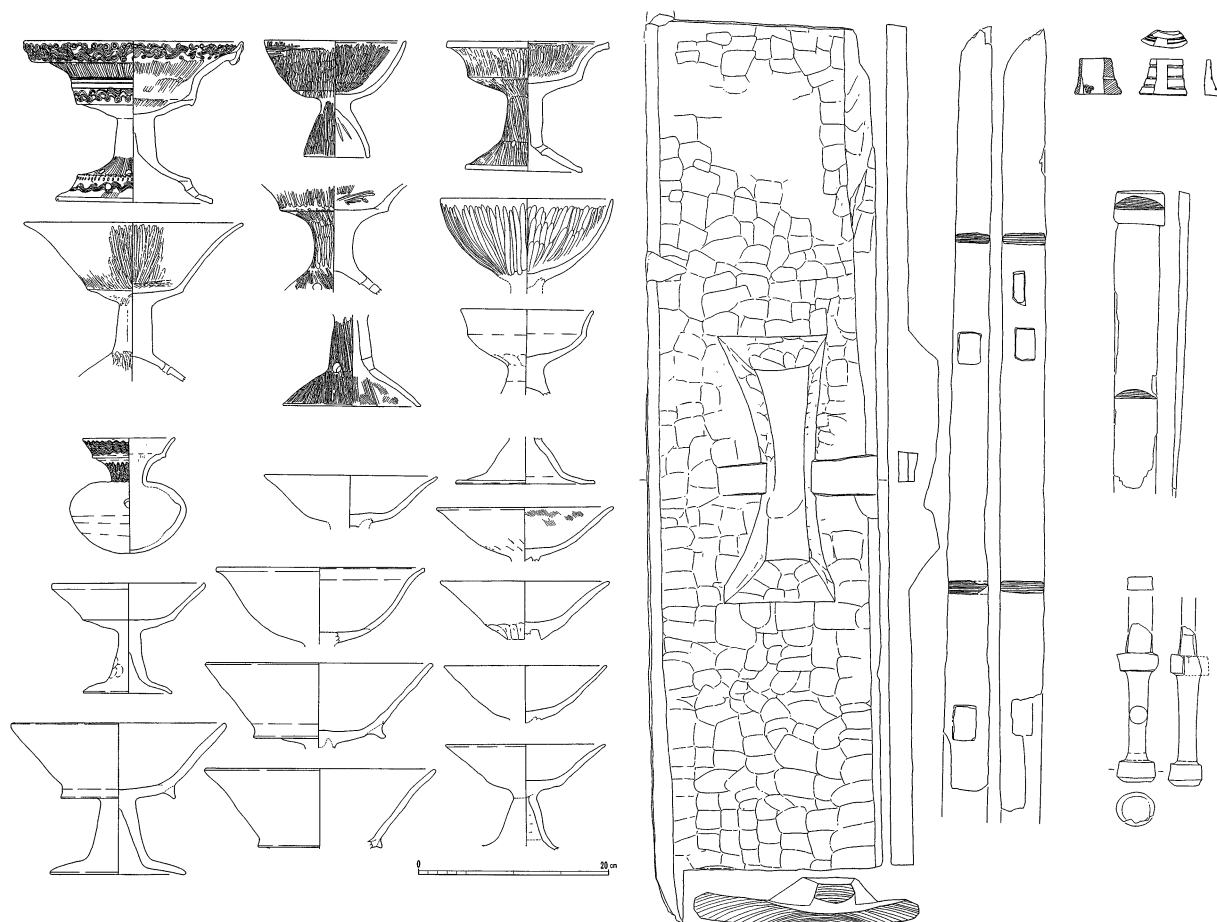
近代古墳は、副葬品と出土した土器・埴輪などから古墳時代中期後葉（TK208型式併行期）に相当すると考えられる。墳形は前方後円墳で埋葬施設には竪穴式石室、副葬品には甲冑セットをはじめ鉾や剣などの武器をもつなど優秀な副葬品をもつ。しかしながら、美旗古墳群の陪塚クラス古墳と比較すると、わき塚古墳では築造された時期の最新甲冑セットが出土しており、セット関係に乱れなどがある当墳の副葬品や埴輪の内容では格差がみられ、被葬者は美旗古墳群の一族よりは下位の身分のものであると考えられる。近代古墳の埋葬施設は伝統的な竪穴式石室を採用しており、被葬者は伝統的な在地勢力であることが看取できるが、古墳の立地やその内容からは美旗古墳群の一族に仕えた者の墳墓である可能性が高く、甲冑についてもこれらの首長を介して入手したと捉えたい。

古墳の所在する上神戸付近は、前期から中期前半に相当する古墳は知られていないが、500mほど北に高賀遺跡⁽²⁶⁾が存在し、大溝から扉部や刀形・刀の鞘・鞘口の木製品が出土している。大溝は庄内式を中心とした時期と古墳時代中期の遺物に大別されるため、古墳と同時期の遺物とは断定できないが、少なくとも、前期以来、この周辺に有力者の存在を裏付ける事例であり、近代古墳の被葬者との関連が窺われる。穂積裕昌氏はその居住域を遺跡の西側の丘陵上に想定⁽²⁷⁾されている。また、高賀遺跡の南の比土には庭園遺構で著名な城之越遺跡や、貼り石遺構が確認された椋ヶ森・沢代遺跡があり、美旗古墳群の被葬者との関連が指摘されており、この地域一帯は有力者の居住区や祭祀空間として機能していた注目すべき地域といえる。

まとめ

古墳時代中期後葉頃になると、伊賀では近代古墳から木津川沿いに5キロほど下った市部に所在するぬか塚古墳や、古い段階の淡輪技法をもつ伊予之丸古墳など、これまで首長墳がみられなかった地域にも古墳が築造されるようになる。これらの勢力の台頭には政治的背景や交通路との関連が考えられる。

美旗古墳群→近代古墳→ぬか塚古墳を結ぶとこれらの古墳は古代東海道が通るルートの縁辺に沿って位置しており、王権の東進のルート上にあったと想定される。しかしながら、このような古墳から王権との直接的な結びつきを明確に示す要素は意外に多くはない。近代古墳に葬られた被葬者は甲冑のセットや埴輪などの検討から、必ずし



第9図 高賀遺跡出土遺物実測図（1：8）

も強力な勢力であったとは考えがたく、美旗古墳群の傍系集団、もしくは一族に仕えた者の墳墓であろう。中期後葉段階における中小規模の古墳の評価については被葬者に王権がどの程度、地方に影響力を及ぼしていたのかを考えるうえで重要であり、近代古墳はこれらの問題を検討するうえで興味深い事項を提示しているといえよう。

小稿をなすにあたり以下の諸氏にご教示・ご協力を賜った。記して感謝致します。

大川操 門田了三 阪口英毅 鈴木一有 穂積裕昌（敬称略）

〔註〕

- （1）豊田祥三「附編－近代古墳発掘調査報告」（『天童山古墳群発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 2006年刊行予定）
- （2）古墳の調査内容に関しては杉谷正樹「近代古墳の甲冑について」（『三重歴史文化研究会発表資料』1993年）仁保晋作「近代古墳」（『上野市史 考古編』2005年 伊賀市）を参考にした。
- （3）甲冑の所見に関しては鈴木一有氏、阪口英毅氏の諸氏に御教示頂いた。
- （4）野上丈助「甲冑製作技法と系譜をめぐる問題点・上」（『考古学研究』21-4 1975年）
- （5）古谷毅「京都府久津川車塚古墳出土の甲冑－いわゆる“一枚鍔”の提起する問題」（『MUSEUM』第445号）
- （6）小林謙一「甲冑製作技術の変遷と工人の系統（上）」（『考古学研究』21-4 1975年）
- （7）鈴木一有「千人塚古墳の研究（1）－衝角付冑について－」（『浜松市博物館館報Ⅶ』浜松市博物館 1995年）
- （8）滝沢誠「鋌留短甲の編年」（『考古学雑誌』第76巻第3号 1991年）
- （9）藤田和尊「頸甲編年とその意義」（『関西大学考古学研究紀要』4 1984年）

- (10) 鈴木一有「千人塚古墳の研究(2)－三角板短甲について－」(『浜松市博物館報Ⅶ』浜松市博物館 1995年)
- (11) 滝沢誠「長野県桜ヶ丘古墳の再調査」(『信濃』第40号第10号 1988年)
- (12) なお三角板革綴衝角付冑の研究動向については橋本達也「野毛大塚古墳出土甲冑の意義」(『野毛大塚古墳』世田谷区教育委員会 野毛大塚古墳調査会 1999年)を参考にさせていただいた。
- (13) 豊田祥三「小谷13号墳出土短甲の検討」(『天花寺丘陵遺跡群発掘調査報告Ⅵ－天花寺城・小谷赤坂遺跡・小谷古墳群(第6・7次調査)』三重県埋蔵文化財センター 2005年)
- (14) 橋本達也「副葬鉄器からみる南九州の古墳時代」(『前方後円墳築造周縁域における古墳時代の多様性』第6回九州前方後円墳研究会 2003年)
- (15) 藤田和尊「古墳時代における武器・武具保有形態の変遷」(『橿原考古学研究所論集8』吉川弘文館 1988年)
- (16) 美旗古墳群の馬塚採集資料、玉塚古墳出土の埴輪は名張市教育委員会の門田了三氏のご厚意により実見させていただいた。
- (17) 館邦典「殿塚古墳」「わき塚1号墳」「わき塚2号墳」(『上野市史 考古編』伊賀市 2005年)
- (18) 山本雅靖「殿塚古墳採集の埴輪」(『伊賀盆地研究会会報』No.70 伊賀盆地研究会 1987年)
- (19) 森浩一・森川桜男・石部正志・田中英夫・掘田啓一「三重県わき塚古墳の調査」(『古代学研究』66 1973年 古代学研究会)
- (20) 註(17)に同じ
- (21) 山本雅靖「古墳時代首長墓の系列的築造と地域構造」(『三重県史研究』第3号 1987年)
- (22) 藤田充子「名張市貴人塚古墳の出土遺物について」(『三重県史研究』第14号 1998年)
- (23) 一瀬和夫「古市古墳群における大型古墳埴輪集成」(『大水川改修にともなう発掘調査概要・Ⅴ』大阪府教育委員会 1988年)
- (24) 田辺昭三『須恵器大成』(角川書店 1981年)
- (25) 森川常厚「森脇遺跡発掘調査報告」(『研究紀要』第13号 三重県埋蔵文化財センター 2003年)
- (26) 三重県埋蔵文化財センター「高賀遺跡」(『平成2年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告－第3分冊－』1991年)
- (27) 穂積裕昌「高賀遺跡」(『上野市史 考古編』2005年 伊賀市)
- (28) 註(25)に同じ

図版の出典

第7図 殿塚古墳 館邦典「殿塚古墳」(『上野市史 考古編』伊賀市 2005年)

女良塚・毘沙門塚・馬塚・玉塚・貴人塚古墳 三重県文化財連盟(『青蓮寺開拓建設事業地域遺跡地図』1970年)

ぬか塚古墳 「ぬか塚古墳」(『上野市史 考古編』伊賀市 2005年)

第8図 殿塚古墳 山本雅靖「殿塚古墳採集の埴輪」(『伊賀盆地研究会会報』No.70 伊賀盆地研究会 1987年)

※ただし、中央の円筒埴輪・盾形埴輪の破片は筆者採集資料

わき塚1・2号墳 森浩一・森川桜男・石部正志・田中英夫・掘田啓一「三重県わき塚古墳の調査」(『古代学研究』66 1973年 古代学研究会)

女良塚古墳 山本雅靖「御墓山古墳の検討」(『考古学論集Ⅰ』考古学を学ぶ会 1985年)掲載を一部改変して掲載

馬塚古墳 山本雅靖「古墳時代首長墓の系列的築造と地域構造」(『三重県史研究』第3号 1987年)

貴人塚古墳 藤田充子「名張市貴人塚古墳の出土遺物について」(『三重県史研究』第14号 1998年)を再トレース



近代古墳全景



竪穴式石室全景



甲冑出土状況（取り上げ後）



近代古墳出土武具・武器